

Beauzée の時制論

— 前未来について

太 治 和 子

1. はじめに

前未来 *futur antérieur* とは、未来のある時点ですでに完了している未来の事行を表す時制であると考えられている。

ところが、この前未来はしばしば過去の事柄に対して用いられる。

- *Vous avez bien fait de venir, cela m'aura permis de vous voir avant mon départ.*
- *Il n'est pas là, il aura manqué le train.*
- *Tu auras mal entendu.*
- *Vous partez! votre séjour parmi nous aura été bien court.*
- *J'aurai fait tout cela pour qu'un gamin me manque aujourd'hui de respect.¹⁾*

これらの文を今までのように前未来の例外的な用法とみなすのではなく、前未来がはたして常に未来の事行を表わすものであるかどうかをここで考えてみたい。

2. 用語 *futur antérieur* について

futur antérieur という用語をはじめて用いたのは、18世紀の文法家 De Wailly (1754) である²⁾。彼は、*futur simple absolu* (単純未来を指す)

1) 朝倉季雄『フランス文法事典』白水社 1983 pp. 162-163.

2) H. Yvon, 《Etude de notre vocabulaire grammatical. Nomenclature des 《tiroirs》 de l'indicatif》, *Le Français moderne* 21, 22, 1953, 1954, pp. 247-262, pp. 11-28.

に対して《une action qui sera faite avant une autre》を futur antérieur relatif と名付けた。その後, Thurot (1795), Lévizac (1797)³⁾, Noël et Chapsal (1823) もこの用語を用いている。前未来を指す他の用語としては, futur parfait (Ramus (1562), Arnauld et Lancelot (1660), d'Aisy (1685), Régnier-Desmarais (1706), Ayer (1853)) や, futur composé (Nicot (1606), Buffier (1709)) や, futur passé (Restaut (1730), Lhomond (1780), Lévizac (1797), Destutt de Tracy (1803), Chapsal (1803)) や futur relatif (Girard (1740), Domergue (1775), Court de Gébelin (1778)) などがあった⁴⁾。

1910年の Commission grammaticale で, futur antérieur の用語が採用されたのは, この時制が, 未来に起こり (futur), さらに別の未来の一時点に対して先行関係にある (antérieur) ような事行を表すと考えられたからである⁵⁾。

ところで, 前未来は, Varron 以外のラテン文法家たち, Ramus や Nicot 以外のフランス文法家たちによって, subjonctif あるいは conjonctif とみなされてきた⁶⁾。従属節中に用いられることが多く, 独立して用いられることが稀だったからである。この時制を indicatif の中に入れることに貢献したのはポール・ロワイヤル文法である⁷⁾。

一方, Beauzée は独自の時制論を展開し, 前未来を *prétérit postérieur* と名付けたが, 後の時代にほとんど影響を与えることなく, 無視され続けてきたようである⁸⁾。

- 3) Lévizac は futur antérieur と futur passé の両方を用いている。
- 4) M. Wilmet, *Etudes de Morpho-Syntaxe verbale*, Klincksieck, 1976, pp. 42-43.
- 5) *Ibid.*.
- 6) Yvon, *op. cit.*.
- 7) R. Donzé, *La Grammaire générale et raisonnée de Port-Royal*, Francke Berne, 2^e éd., 1971, pp. 119-124.
- 8) 例えば, B.E. Bartlett, *Beauzée's grammaire générale*, Mouton, 1975. は, Beauzée の時制論についてほとんど触れていない。

しかしながら、20世紀前半に起こった前未来をめぐる一連の論争の中で⁹⁾、Beauzée が引用されることもあった¹⁰⁾。また、Beauzée の時制論の持つ近代性や、Guillaume のアスペクトの考え方との共通点が最近指摘されつつある¹¹⁾。次章では、Beauzée の時制論全体をまずとりあげる。

-
- 9) Wilmet, *op. cit.*, pp. 41-42.
- 10) H. Yvon, «Indicatif futur antérieur, ou Suppositif probable d'aspect composé?», *Le Français moderne*, 1953, pp. 169-177. 彼は Damourette et Pichon を引用しているが、後に述べるように Damourette et Pichon は Beauzée を高く評価しており、したがって間接的にはあるが Beauzée の前未来論がとりあげられている。
- 11) ◦ M. Wilmet, «La modernité de Beauzée», dans R. Mortier, H. Hasquin éd., *Etudes sur le XVIII^e siècle 8*, Bruxelles, Editions de l'Université, 1981, pp. 109-123.
- P. Swiggers, *Grammaire et théorie du langage au 18^e siècle, "mot", "temps" & "mode" dans l'encyclopédie méthodique*, Presses universitaires de Lille, 1986.
- P. Swiggers, «Temps et verbe dans la théorie grammaticale des Encyclopédistes», *Lingua Posnaniensis XXX*, 1987, pp. 97-107.
- S. Auroux, «Innovation et système scientifique: Le temps verbal dans la grammaire générale», dans S. Auroux et alii, *Hommage à Jean-Toussaint Desanti*, T.E.R., 1991, pp. 55-86.
- C. Veters, «Beauzée comme précurseur de Reichenbach», in: *De la musique à la linguistique, Hommages à Nicolas Ruwet*, édités par L. Tasmowski & A. Zribi-Hertz, Ghent, Communication & Cognition, 1992, pp. 556-567.
- M. Le Guern, «Notes sur le verbe français», in: sous la direction de S. Rémi-Giraud et M. Le Guern, *Sur le verbe*, Presses universitaires de Lyon, 1986, pp. 9-60.

3. Beauzée の時制論¹²⁾

百科全書の中の項目《Tems》を要約すると〈表1〉のようになる¹³⁾。

〈表1〉

PRESENTS	{	indéfini	“je chante”	
			définis {	antérieurs {	simple
			périodique ...	“je chantai”	
			postérieur	“je chanterai”	
<u>PRETERITS</u>	positifs	{	indéfini	“j’ai chanté”	
			définis {	antérieurs {	simple
				périodique ...	“j’eus chanté”
				postérieur	“j’aurai chanté”
		comparatifs	{	indéfini	“j’ai eu chanté”
				définis {	antérieurs {
			périodique ...	“j’eus eu chanté”	
			postérieur	“j’aurai eu chanté”	
	prochains	{	indéfini	“je viens de chanter”	
			définis {	antérieur	“je venais de chanter”
			postérieur	“je viendrai de chanter”	
	<u>FUTURS</u>	positifs	{	indéfini	“je dois chanter”
définis {				antérieur	“je devais chanter”
			postérieur	“je devrai chanter”	
prochains		{	indéfini	“je vais chanter”	
			défini ... antérieur	“j’allais chanter”	

12) 使用テキストは以下の通りである。

◦ *L’Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, t. 16, A Neufchastel, Chez Samuel Faulche, 1765, pp. 96-117.

◦ N. Beauzée, *Grammaire générale*, t. 1, J. Barbou, 1767, pp. 422-513.

13) *L’Encyclopédie*, t. 16, p. 109 の表を一部分削除して作成。なお、表の中の下線は筆者による。

この表の中で、前未来は *prétérit-positif-défini-postérieur* で表されている¹⁴⁾。

直説法 *indicatif* はまず, *présent*, *prétérit*, *futur* の3つに分けられる。ただし、今日我々が用いている用語の意味とは全く異なることに注意しなければならない。*présent* とは現在時制のことではなく、ある基準点に対する同時性を、*prétérit* は過去時制のことではなく、ある基準点に対する完了性・先行性を表している。動詞の形態に注目すれば、*présent* は単純形 *forme simple* になり、*prétérit* は複合形 *forme composée* になる。*présent* は未完了アスペクトを、*prétérit* は完了アスペクトを表すと言ってもよいかもしれない¹⁵⁾。なお、*futur* については本稿ではとりあげない。

次に、*présent*, *prétérit* はそれぞれ、基準点が時間軸上どこに置かれてもよい場合 (*indéfini*) と、一点に定まる場合 (*défini*) とに分けられる。一点に定まる場合には、基準点が発話時点より前 (*antérieur*)、同時 (*actuel*)、後 (*postérieur*) のいずれかになる。ただし、同時 (*actuel*) については、*indéfini* と同形になるので表の中では省かれている。*présent indéfini* とは今日我々が「現在」と呼んでいる時制であるが、これは発話時点と同時にある事象についてのみ用いられるのではなく、物語の中で過去時制の代わりに用いられたり、《*Je pars demain*》が未来を表したり、さらには《*les trois angles d'un triangle sont égaux à deux droits*》のように時間を越えた (*abstraction de toute époque*) 真理を表したりする¹⁶⁾。

14) 百科全書の中には《*Futur*》という項目が存在する。ただし、この項目は Douchet との共同執筆によるもので (署名は E.R.M.), Beauzée 自身は不満だったようである。後になって、百科全書の項目《*Temps*》の中 (t. 16, p. 100) や著書 *Grammaire générale* (pp. 447-448 の注 (8)) の中で、この項目《*Futur*》を批判している。

15) Beauzée はアスペクト *aspect* という語を一度も用いていない。

16) *L'Encyclopédie*, t. 16, p. 98, *Grammaire générale*, t. 1, pp. 435-438. Auroux は、この *temps indéfini* の考え方が Benveniste, Culioli, Desclés の *valeur aoristique* の考え方につながるものであるとして評価している。(Auroux, *op. cit.*, p. 64).

この *présent indéfini* は、時間軸上のどの時点（基準点）に対しても同時性を表わすことのできる時制であるが、時を表す副詞や前後の文脈によってこの基準点が特に指定されない場合には、最終的に残る基準点すなわち発話時点に帰せられることになり、これが *présent actuel* になると考えられた。

ところで、*prétérit* の中には、今日の重複合時制にあたる *prétérit comparatif*¹⁷⁾ と、迂言法 (*venir de+inf.*) にあたる *prétérit prochain* が加えられているので、本来の *prétérit* については *prétérit positif* の名称が与えられている。

prétérit とは、先にも述べたように、なんらかの基準点があって、その基準点より以前に行われたことを述べる時制であり、その基準点が発話時点よりも未来にあれば、それは今日の前未来を指すことになる。したがって、Beauzée は前未来を *prétérit positif défini postérieur*、あるいは省略して *prétérit postérieur* と呼ぶ。

彼が前未来を考える時にまず注目するのは、ある基準点より以前にある事行を表すということであって、未来であるということではない。*prétérit postérieur* を今日の用語に直せば *antériorité au futur* であり、*futur antérieur* とは語順が逆になるが、これは単に用語の問題にとどまるものではなく前未来の基本概念を理解する上で非常に重要な点である。

4. Beauzée の前未来論

ポール・ロワイヤル文法の中では、前未来は、(1)それ自身未来に起こることであり、(2)もうひとつ別の未来に起こる事柄に対しては過去の関係にある行為を示す時制であると説明されている¹⁸⁾。これに対し、Beauzée は次のように反論する。

17) Beauzée は *prétérit comparatif* を時制の分類の中に加えることによって重複合時制のメカニズムを明らかにしたが、本稿では詳述を避ける。

18) Cl. Lancelot and A. Arnauld, *Grammaire générale et raisonnée*, Menston, The Scholar press limited, 1967, pp. 103-107.

Une autre erreur de cet écrivain célèbre, est de croire que *caenavero* (j'aurai soupé), marque mon action de *souper* comme future en soi, et comme passée au regard d'une autre chose à venir, qui la doit suivre. *Caenavero* et tous les temps pareils des autres verbes n'expriment absolument que le second de ces deux rapports ; et loin d'exprimer le premier, il ne le suppose pas même.¹⁹⁾

そして、Pluche の文《Si le tombeau est pour lui la fin de tout ; [...] le Créateur [...] n'aura établi ni règle ni justice [...]》を引用し、次のように分析している。

Le verbe *aura établi* n'exprime donc en soi aucune futurition, & l'on auroit même pu dire, *Le Créateur n'a établi ni règle ni justice* ; ce qui exclut entièrement & incontestablement l'idée d'avenir : mais on a préféré avec raison le Prétérit postérieur, parce qu'il étoit essentiel de rendre sensible la liaison de cette conséquence avec l'hypothèse [...], que l'on suppose future ; & que rien ne convient mieux pour cela que le Prétérit postérieur, qui exprime essentiellement relation à une époque postérieure.²⁰⁾

Beauzée は前未来が必ずしも未来を示すわけではないと述べている。Damourette et Pichon は、Beauzée の文章をそのまま引用し、Beauzée の方が正しいと書いている²¹⁾。

Portine は、時間軸を使って説明する²²⁾。前未来で表される事行を点 E、

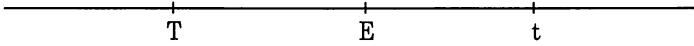
19) *L'Encyclopédie*, t. 16, p. 101.

20) *Ibid.*.

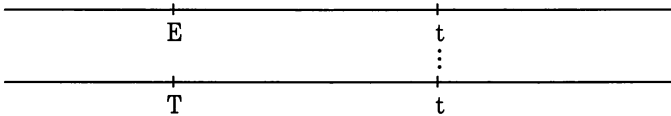
21) J. Damourette et E. Pichon, *Des mots à la pensée. Essai de grammaire de la langue française 1911-1936*, t. 5, d'Artrey, p. 456.

22) H. Portine, 《Beauzée et le futur antérieur: Les axes du temps》, *Histoire, Epistémologie, Langage*, à paraître en 1996. を原稿段階で刊行前（印刷中）に閲読する機会をえた。

未来にある基準点を点 t 、発話時点を点 T とすると、ポール・ロワイヤル文法の考え方は一本の時間軸上で示することができる。



これに対し、Beauzée の考え方は時間軸を 2 本必要とする。



上の軸は、前未来 E が基準点 t よりも過去にあることを示し (prétérit の関係)、下の軸は、基準点 t が発話時点 T よりも未来にあることを示している (postérieur の関係)。これら 2 本の時間軸上においては点 t の位置は等しいが (図の中では破線で示されている)、 T と E の関係は定めることはできないのである。

Beauzée とよく比較される Reichenbach は、未来完了を次のように考えている²³⁾。

$$\left\{ \begin{array}{l} S—E—R \\ S, E—R \\ E—S—R \end{array} \right. \quad \begin{array}{l} S = \text{発話時点} \\ R = \text{基準点} \end{array}$$

E = 未来完了で表される事行

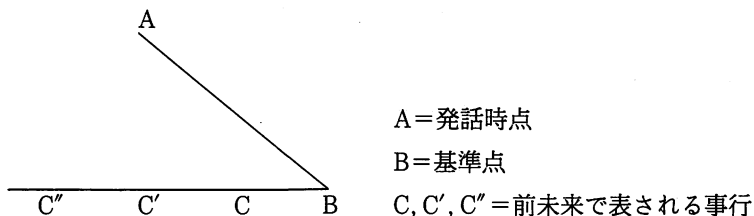
また、Wilmet は前未来について次のような図を載せている²⁴⁾。

23) H. Reichenbach, *Elements of Symbolic Logic*, New York, The Macmillan company, 4th printing, 1952, p. 297.

24) Wilmet 1976, *op. cit.*, p. 45.

厳密には、Wilmet は 3 つではなく 6 つに前未来を分類している。前未来で表される行為の起点を x 、終点を y とすると、次の 6 通りの場合が考えられる。

- | | |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. $x = \text{過去}$, $y = \text{過去}$ | 2. $x = \text{過去}$, $y = \text{現在}$ |
| 3. $x = \text{過去}$, $y = \text{未来}$ | 4. $x = \text{現在}$, $y = \text{現在}$ |
| 5. $x = \text{現在}$, $y = \text{未来}$ | 6. $x = \text{未来}$, $y = \text{未来}$ |



これらの図を理解するために、ここで《Jean aura terminé son rapport demain à midi》という文をとりあげてみる。この文の中では基準点は《demain à midi》で示されている。《aura terminé》で表される行為は次の3通りになる。

- (1) この文が発話された時点ですでに Jean は報告書を書き終えてしまっている。
→Reichenbach の図では E—S—R
Wilmet の図では点 C''
- (2) Jean は現時点でまさに報告書を書き終えるところである。
→Reichenbach の図では S, E—R
Wilmet の図では点 C'
- (3) Jean は明日になってやっと報告書を書き終える。
→Reichenbach の図では S—E—R
Wilmet の図では点 C

しかしながら、Reichenbach も Wilmet も発話時点との時間関係を常に考えていることには変わりなく、その意味で彼らの時間軸は常に一本である。

これに対し、Beauzée はそもそも発話時点との時間的な前後関係を問うことがない。《aura terminé》で表される行為は、未来時にある《demain à midi》よりも過去であることしか示さない。したがって、2本の時間軸が必要となるのである。この考え方は、次章で述べる前未来のさまざまな用法を理解する上で重要である。

5. 前未来のさまざまな用法と *notion polyaxiale* について

Sten は、《Au fond toutes les actions non futures pourraient être considérées comme appartenant au *prétérit du futur*》と述べている²⁵⁾。例えば、《Leur cuisine n'aura jamais été aussi propre》は《On dira plus tard que la cuisine n'a jamais été aussi propre》の簡約語法的表現であり、また Imbs が述べているように²⁶⁾、すべての他の簡約語法的表現と同じように *expressif* な文体効果を持つ。

佐藤正明は、前未来の用法を次の3つに分類している²⁷⁾。

1. 未来時指向のある時間的用法

J'aurai fini avant ce soir.

2. 推測用法

Comme le jardin est en bon état! le jardinier sera venu ce matin.

3. 個人的評価（感情的評価）を表す用法

Il aura beaucoup plu aujourd'hui; j'en ai par-dessus la tête.

1は前未来の本来の用法であるが、2と3は複合過去に代わって用いられる前未来である。

2の推測用法とは、判断を未来に先延ばしにし、未来の時点に立って過去の事柄を推測するという構造を持つ。《on pourra dire que ~》、《on constatera que ~》、《nous saurons que ~》などを補って考えてみるとよい。

Wilmetによれば²⁸⁾、これは発話時点 (*moi-ici-maintenant*) を無視し

25) H. Sten, *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, København, Munksgaard, 1952, p. 203.

26) P. Imbs, *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck, 1968, p. 112.

27) 佐藤正明「発話者の個人的評価を示す前未来」『フランス語学研究』第28号 1994 pp. 1-13.

28) Wilmet 1976, *op. cit.*, p. 53.

て過去の事柄を述べる用法で、自分の発言内容に責任を持たずにすみ、主語は3人称が多いとのことである。

Damourette et Pichon は、次のような例を挙げて説明している²⁹⁾。

Voilà ce qui sera arrivé. Comme je banquetais aux Pieds-gelés, ma femme, embêtée de rester seule, sera allée dîner chez sa mère, et elle attend, pour en revenir, que la pluie ait cessé de tomber.

(Courteline, *Coco, Coco et Toto*, Cochon de Coco, p. 37.)

Coco は最初妻に何が起こったのかよくわからない。そこで、いずれ妻が帰宅すれば事が明らかになるであろうと思い、その時点に立って《sera arrivé》, 《sera allée》と、推測の前未来で発言する。ところがそのうちに Coco は妻が本当に実家に帰ったのだと確信するようになり、最後の動詞《attend》は現在形におかれているのである。同様の例が、Imbs の中にも見られる³⁰⁾。

Le bon Dieu vous aura pris dans sa maison pour vous regarder de près et puis vous aura lâché. Seulement il voulait vous mettre dans un couvent d'hommes; il s'est trompé. (V. Hugo)
 話が進むにつれて quasi-certitude に到ると、動詞の時制は前未来から半過去・複合過去へと移行している。また、ここから語調緩和の用法(《Tu auras mal entendu》³¹⁾)も生まれることになる。

Brunot の指摘によれば³²⁾, 前未来の推測用法は今日一般的に用いられているが、すでに古仏語の中にその用例が見られるそうである。しかしながら、次の評価型の用法に比べれば比較的新しいものだと言うことができる³³⁾。

29) Damourette et Pichon, *op. cit.*, t. 5, pp. 458-459.

30) Imbs, *op. cit.*, p. 114.

31) 朝倉季雄 前掲書 p. 163.

32) F. Brunot, *La Pensée et la Langue*, 3^e éd., Masson et Cie, 1965, p. 531.

33) Wilmet 1976, *op. cit.*, p. 55.

3の評価型の前未来は、Wilmet³⁴⁾やYvon³⁵⁾がexpressifな用法、Sten³⁶⁾がcaractère affectifを持つ用法と定義しているもので、先の推測用法と同じく複合過去に代わって用いられる。この用法はとても古くからあるもので、古仏語あるいはラテン語の文献の中にさえ見られる³⁷⁾。ただし、Imbsは逆にこの用法は日常口語から出たもので次第にclassiqueになったと考えている³⁸⁾。いずれにせよ、今日多用され、とりわけ新聞の中にその用例が多い³⁹⁾。

Imbsは、この用法もまた文の一部が省略されていると考える。

J'aurai donné à cette maison les trente plus belles années de ma vie pour en venir à ce résultat de me faire dire : 《Prenez la porte》
(Courteline)

=Je m'indigne à la pensée que je devrai me dire un jour : 《j'ai donné ...》

そして、未来のある時点に立って評価を下している文だと説明する⁴⁰⁾。Brunotも、これは過去の事柄を未来に関連づけ、現時点を度外視して述べる表現であると考えている⁴¹⁾。Le Bidoisは、次の文は過去の事実に対しaffirmation catégoriqueを示すものであるが、戦争中に述べられたもので、戦争が終わる未来の時点に立って判断を下しているニュアンスがあると説明している⁴²⁾。

34) *Ibid.*, pp. 48-52.

35) Yvon 1953, *op. cit.*, p. 176.

36) Sten, *op. cit.*, p. 204.

37) Wilmet 1976, *op. cit.*, p. 51.

38) Imbs, *op. cit.*, p. 113.

39) Yvon 1953, *op. cit.*, p. 176.

40) Imbs, *op. cit.*, p. 111.

41) Brunot, *op. cit.*, p. 480.

42) G. et R. Le Bidois, *Syntaxe du français moderne*, t. 1, A. Picard, 1967, p. 456.

Au cours de cette guerre, les junkers auront bien souffert.

(P. Benoît, *Axelle*, 94)

Wilmet の解釈も同様で、話者は未来のある時点に立ち過去の事件に対する最終評価・総決算 bilan を行っているのだと考えている⁴³⁾。

Yvon が挙げている次のような例も、

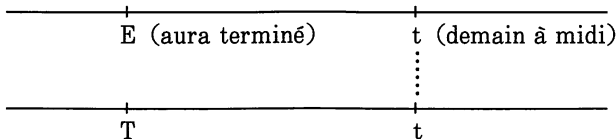
◦ Et j'aurai vécu dix ans comme j'ai vécu, abîmée de désespoir dans ma solitude, pour retrouver devant moi cette même horrible calomnie. (P. Bourget, *La Terre promise*, p. 289)

◦ La trêve de fait qui s'était établie sur le front de Corée n'aura pas été de longue durée. (*Le Figaro*, 30-11-51)

「総決算を下す」前未来の用法である。したがって、最初の例の中では、《j'ai vécu》は単なる事実の確認 constatation であるのに対し《j'aurai vécu》はその確認された事実に対する抗議の気持ちを表現している⁴⁴⁾ という文体上の効果も生まれるのである。

ここで、前章で述べた前未来の基本構造に戻る。前未来とは2本の時間軸を用いて次のように説明できた。

《Jean aura terminé son rapport demain à midi.》

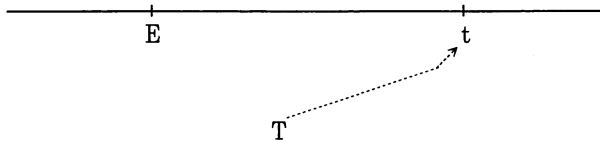


ところで、推測用法とは、未来時にある基準点に立って、現時点では確信の無い過去の事柄について述べるものである。また同じように、評価型用法とは、未来時にある基準点に立って、過去の事件について最終的な評価を下す用法である。いずれの場合にも、基準点 t は文中の語によって示されてはならず、補って考えなければならない。ある事件が終結する時点であるとか、ある事柄について確信を得られるであろう時点などを想定する

43) Wilmet 1976, *op. cit.*, p. 50.

44) Yvon 1953, *op. cit.*, p. 176.

わけである。そして、発話時点を度外視して発話されるのである。これらの用法は、次のように示すことができると思われる。



すなわち、2本の時間軸上のうちの上の時間軸上のt点に立って発話する構造を持つのではないだろうか。

6. 複合過去に代わる前未来の実例

最後に、複合過去に代わる前未来の実例を、*Le Monde, sélection hebdomadaire, édition internationale* を使って調べてみた。N° 2305 (1992年12月31日) から N° 2443 (1995年8月31日) までの第一面には、87例前未来が使われている。そのうち、厳密に本来の時間的な用法で用いられているのは17例しかない。

推測用法については、例えばスー・チー女史解放の記事の中に次のような文がある。

- Il est probable, aussi, que les épreuves auront appris à M^{me} Suu Kyi le «sens du terrain» (N° 2436)

《les épreuves》は、現時点ではすでに過去のものであるが、現時点では確信の無い事柄を、いずれ明らかになるであろう未来の時点に立って《auront appris》と述べている。同じような例をいくつか挙げる。

- L'acte de terrorisme qui a fauché cinquante-deux Palestiniens, [...] aura ainsi contribué à faire surgir une évidence : [...] (N° 2365)
- Il semble que les élections du dimanche 18 juillet auront, tout compte fait, conforté la domination des conservateurs sur la vie politique nippone, [...] (N° 2333)
- Quelques éminents «euroseptiques» britanniques [...] étaient venus

la semaine précédente à Copenhague pour encourager le camp du «non» [...]. Mais leur coup de pouce de dernières minutes n'aura guère eu d'effets : les Danois ont choisi une voie raisonnable, [...]

(N° 2325)

- [...], Jean Lecanuet est mort, lundi 22 février, à Paris, à l'âge de soixante-douze ans. Il aura contribué, sous le septennat de M. Valéry Giscard d'Estaing, à unifier les deux grandes familles de la droite non gaulliste [...] par la création de l'UDF [...]

(N° 2312)

- [...], M. François Mitterrand a lancé, à Hanoï, plusieurs messages importants. Tous n'auront pas été également agréables aux dirigeants vietnamiens. Mais l'un d'eux, au moins, aura été doux à leur oreille.

(N° 2311)

次に、評価型の前未来の例を挙げる。

- Cinquante-cinq jours d'enquête auront été nécessaires pour arrêter Asahara, [...]

(N° 2428)

- La trêve n'aura duré que quelques heures en Tchétchénie. Boris Eltsine avait à peine annoncé [...] une proposition de «cessez le feu», lundi soir 9 janvier, [...] que les bombardements russes reprenaient, de plus belle, mardi matin, sur le centre de Grozny.

(N° 2410)

- En un peu moins d'un demi-siècle, la France aura récolté sept médailles Fields sur les trente-huit qui ont été décernées.

(N° 2388)

- Le comédiens, décédé samedi 22 janvier, aura tenu la scène plus d'un demi-siècle

(N° 2360)

中には、一種の慣用表現のように繰り返し使われるものもあり、その代表的なものが il aura fallu ～ pour ～ の構文である。14例あったが、その中のいくつかを挙げる。

- Il aura donc fallu plus de cinquante ans pour qu'une vérité inscrite dans la mémoire de dizaines de milliers de Français soit enfin reconnue et énoncée par le premier d'entre eux, le président de la République. (N° 2437)
- Il aura fallu la tragédie d'Irma Hadzimuratovic, cette fillette de cinq ans grièvement atteinte par des éclats d'obus [...], pour que les gouvernements occidentaux se réveillent et pensent tout à coup au sort des victimes des bombardements. (N° 2337)
- Il aura fallu plus de trois ans pour que prenne enfin corps ce qui était inscrit dans la logique de la libération de Nelson Mandela, en février 1990. (N° 2331)

また、jamais と共に用いられた例もいくつかあった。その中の1例を次に挙げる。

- Elmer Allen n'aura jamais su pourquoi certains médecins s'intéressaient tant à lui [...]. Il s'en doutait un peu [...]. Elmer Allen est mort en 1991, deux ans trop tôt pour connaître la vérité. (N° 2360)

7. おわりに

「前未来は未来の事行を表す」という従来の考え方では、あまりに多くの例外が存在することがわかった。Damourette et Pichon が言うように、《Beauzée a donc parfaitement raison》⁴⁵⁾ だったのではないだろうか。複合過去に代わって用いられる前未来は、これまで考えられてきたように特殊な用法なのではなく、前未来の基本的概念——ある基準点に対する先行・完了を示す。その基準点は未来に置かれる。発話時点 T と前未来 E の時間的前後関係は問わない。——から理解できるのである。18世紀には先駆的であったこうした考え方は、Beauzée の残した功績のひとつとして評価されるべきであると思われる。

(本学非常勤講師)

45) Damourette et Pichon, *op. cit.*, p. 456.